

山と博物館

第38巻 第5号 1993年5月25日

大町山岳博物館



ミソサザイの囀り 写真と文 田中宏一郎

愛鳥週間によせて

木々の芽吹きの色模様はなんともいいような不快さを感じさせませんが、これと並行して小鳥たちの世界にも躍動の姿を見かけることが出来ます。

梢で囀るホオジロやシジュウカラなど地元の鳥に加えて、はるばる海を渡ってやって来たオオルリやセンダイムシクイなどの姿も目に入りやす。それらの鳥たちが入り混って一斉におしやべりを始めるので、山の中も一段とにぎやかになります。また一方では既に巣作りから抱卵に入ったと思われるモズやエナガのひたむきな活動振りを見かけることができます。かれらは人目につかないようにひっそりと行動しています。

このような現象は春が来るたびに必ず見られるわけですが、その都度今年も春の季節がやって来たんだと、改めて気持ち新たにすることができ、一種の安堵感にひたります。

過日山へ出かけて小鳥たちの様子を探ってみました。一か所へ腰を据えて鳥の来るのを待っていたのですが、三十分ぐらいの間に結構たくさん鳥が来るものだということがわかりました。近くに生息場所を構えている鳥餌を漁りながら移動してきた鳥、上空を通過した鳥等、十種近く観察することができました。餌を探しながら移動していた鳥は番でいた。探鳥だからといって歩き回ることだけ考えなくてもよさそうです。鳥の集まってくるような場所を探し当てれば、そこで楽しむことができます。水場があれば鳥が寄ってくる可能性が高いといえます。

鳥の姿を眺めたり鳴き声を耳にするには絶好の季節といえます。

写真はミソサザイ(ミソサザイ科)が囀っている場面です。体の小さい割に大変大きな声を発するのでびっくりします。ミソサザイとは小さい鳥をあらわすので、別称ミソツチヨとも呼びます。

(池田町在住)

北極の開発・歴史と現状(前)

太田 昌秀

山博に極地の話というのはお門違いという感じを持たれる人もあるかと思いますが、山歩きの好きな人々の気持の延長には、できた極地へも”という憧れがあり、未踏への挑戦という点で共通のものがあると思います。

一九五七年、日本初の南極越冬隊は、隊員のほとんどが山屋でしたし、大ぞりで北極点に達し、グリーンランドを縦断した植村直己氏も山岳部出身でした。先日は山博から四十年史の本を戴き、懐しく拝見しました。故郷は遠くに在りて想うもの”といいますが、遠く離れていなくても大町はとても美しい所です。博物館発足当時の名前を見てみると、あの頃のことを昨日のようによみがえってきます。あの人達に連れられて、私も何度も西山に登り、石拾いをしたものでした。その中で、山登りの楽しさと共に、山を科学する心を教えて戴きました。私は山岳部というものに所属したことはありませんが、飛驒の石を勉強し、北欧やヒマラヤを歩き、南極や北極を商売するようになったのも、あの頃北アルプスの山々で先輩や、仲間達に導いて戴いたお陰だと、深く感謝しております。

私は当地に来てからほとんど毎年北極へ出かけていますが、南極へは、四、五回行っただけです。今回は北極に話を限ろうと思います。

近年、突如として起ったソ連の崩壊によって、北極海の半分を占めるシベリア沿岸が世

界に開かれることになりそうです。そこでこの地域の開発の歴史と現状をまとめて御紹介しようと思います。

南極は一七八〇年代に、キャプテン・クックが世界周航をして冰山を眼にするまで未知の領域でしたが、北極地方は文明発生の初めから人類活躍の舞台でした。(図一)約五〇〇万年前にアフリカの地溝帯で誕生した人



図-1 1600年代の世界地図

類は、長い時間をかけてゆっくり進化しながら北上し、五〇万年前には北緯四〇度に達し、八万年前には北京人になり、五万年前にはバイカル湖の北まで進出しました。この北進は人類初の寒さへの挑戦でした。最後の氷河期は約七、八万年前に始まり、二万年前頃最も寒く、一万年後に終わります。水期には世界の海面が今より二〇〇〜三〇〇メートル低くなり、アジアとアメリカの間のベーリング海や、北極海の大陸棚が干上って氷のない寒冷な大平原、”ペーリンジア”になったので、人々は獣を追いながらアメリカ大陸へ渡りました。多くの人々は、カナダ・ロッキーマウンテンの東にあった氷のない廊下を通って南下し、インディアンや、インカ人になりましたが、一部の人々は北極海沿岸にも住みつきました。アジアに残った人々の中にも、獲物の多い北極海沿いのタイガの森林に分散し、小さな部族に分れて狩猟生活を続けるものもありました。(図一2)

これらの中にはアイヌや、サーメ、フーメン、イヌイト人のように、自分達のことを”人間”という意味の名で呼ぶ人々がいます。南の”文明人”を自称する連中は、アイヌ人を”エゾ”と蔑称し、フーメン人を”奴隷”と呼び、サーメ人をラップ(ボロクソ人)、イヌイト人をエスキモー(生身を食らう奴等)、ニエニエツツ人をサモエド(自分の仲間を食う連中)などと呼びましたが、このような蔑称は止めなくてはなりません。

モンゴロイドがこのように広がっている間に、ネグロイドは南に留り、コーカソイドは北西へ進みました。そしてコロンブスも、ま

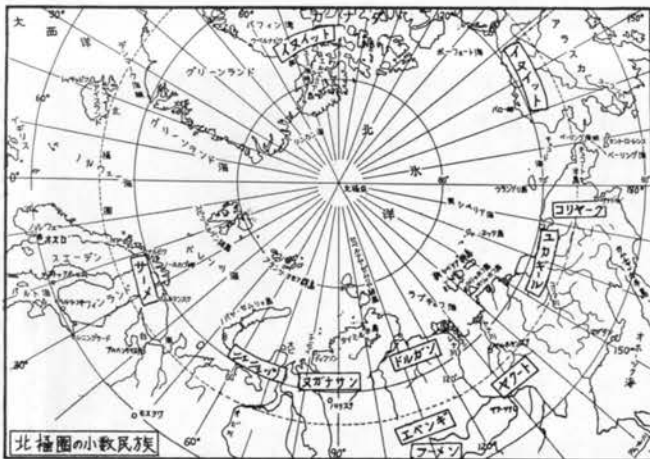


図-2 北極海沿岸の先住民族

たそれより五〇〇年も前にアメリカへ到達したというバイキングも、北極の地ですでに永い間平和に暮らしてきたモンゴロイドに出会ったのです。それはようやく十世紀になってからのことでした。そして、南で激しい戦いに明け暮れて鍛えられてきた連中は、優れた武力を持っていて北の人々を力で支配し始めるのです。

ウラル山脈の西のロシアでは、十世紀後に一時バイキングの王朝や蒙古の支配があった後、一六二三年にロマノフ王朝ができ、強大な帝政の下に、小数の貴族と沢山の農奴からなる社会を作っていきます。この圧政を嫌った人々は、ツァーリの権力が及ばない南へ移動し、コサック(自由の民)になりました。

一六〇〇年代後半にはビョートル大帝が現れ、現在のベレストロイカよりずっと激しい西欧化を企てました。西欧の産業革命と、植民地拡大に追いつこうと、彼は古い農奴国家の一新を志し、実用技術のみならず日常習慣まで変えることを命じました。物を言う権利さえない人々に、人頭税や徴兵制を課し、ヒゲを伸ばす者に税をかけ、お祈りの十字の切り方まで新しい方法を強制したのです。そして急造した軍隊で先ず南へ海を求めて侵略を始め、初めは不成功でしたが、やがて当時の北欧の大国、スウェーデンを破ってバルト海を「ロシアの湖」にしました。このビョートルの支配を好まないコサツクの多くは北や東へ逃れ、古くから北方民族の住んでいた地域に入りこみました。こうしてシベリアは、コサツクの流民、逃亡兵、流刑者の地として、ロシア帝国の権力の下に組み込まれていくのです。

ビョートルより百年も前、コサツクの一部はすでに西シベリアへ植民し、先住民から毛皮やマンモスの牙などを税金として取り上げていました。一六四八年にはデジネフというコサツクが一隊を率いてシベリア東縁を航海し、アメリカとの海峡を通り抜けています。そこは今、ベーリング海峡と呼ばれています。これは後にキャプテン・クックがデジネフのことを知らずに、ベーリング海峡と呼びそれが広まったからです。

スウェーデンに勝ち、西欧に覇を築いたビョートル大帝にとって、世界中を航海して先住民の有無などおおかまいなしに、上陸した海岸に旗を押し立て、女王陛下の土地だと宣言していくイギリスの植民地帝国は最大の脅威でした。キャプテン・クックの航海や北太平洋



図-3 ロシア宮廷に提出した地図

洋への捕鯨船の出没も彼にはイギリス植民地主義の尖兵にみえたのです。そこで彼は死の直前、デンマーク人、ベーリングにシベリア探検を命じ、ベーリングはビョートルの死んだ一七二五年に東へ向って出発しました。彼は第一回の探検で北緯六七度まで進み、アメリカとの間の海峡を確認したつもりでしたが、宮廷はそれを満足せず、彼は二回目の探検を計画しました。これにはそれまでカリフォルニアまでしか知られていなかったアメリカ西岸の測量や、日本への交易ルートの開発も含まれていて、沢山の学者が参加して、シベリア北岸全域の調査が進められ、東方大探検と呼ばれています。日本へのルートは成功しませんでした。アラスカが発見され、アリューシャン列島も測量されて、北太平洋の毛皮海獣の大濫獲が始まるのです。

この探検には後進植民地国特有のエピソードがあります。西欧化を旨とするロシアの宮廷には西欧からのお雇い教授が多数滞在しており、そのうちのフランスの地理学者が一枚の北太平洋の地図を提出しました。これにはアリューシャン列島の西部に船から遠望したという大きな陸地が記入されていました。(図-3) 宮廷はベーリングに先ずこの陸地を確認することを命じたので、彼は短い夏の初めの貴重な一ヶ月をこの探索で無駄を費してしまいました。そのため、アラスカを発見してから帰国するのが遅くなり、氷にはばまれてカムチャッカ東の無人の小島で越冬を強いられ、沢山の隊員と共に彼自身も命を落しました。フランス人教授の提出した地図は、探検の成功をさまたげるために在りもしない偽りの陸地を記入したもので、彼は後に諜報員であることが露顕して追放されています。これはそれから百年後、日本へ西欧医学紹介などで大きな貢献をしたシーボルトが、帰国の際に伊能忠敬の作った日本地図を持ち出そうとして追放された事件を思い出させます。植民地時代の地図は重要な国の機密でした。

ベーリングの探検は一年以上もかかるシベリア横断の旅も含んでおり、この長い旅はシベリアの植民・流刑地を中継して行われました。大きな町には地方長官の役所があり、先住民から税を徴集していました。税の主なものには毛皮です。聖者の創世記に「神、アダムとその妻に皮衣をつくって着せ給いき」とあるように、糸を紡ぎ布を織る以前から毛皮は人間の衣料であり、その天恵の柔かい肌触りに人間は本能的な郷愁を感じます。毛皮はまた権威と富の象徴でもあり、王侯・貴族は夏は白テン、冬は黒テンの肩掛けをまといました。十三世紀のイギリスでは、貴婦人は白テ

ンの縁飾りを用い、庶民の妻は猫の毛皮を用いよと法律で定め、日本の延喜式(八八五年)でも、テンの姿を参議以下の者が使用することを禁じています。帝政ロシアでは、先住民が白テンの毛皮をツァーリに献上するのが、被征服者の哀しい表敬のしるしでした。人々は極北のタイガをさまよってキツネやテンを追い、流水の打ち寄せる北極海の岸辺で、夏の雪解け期に現れるマンモスの牙を求め、苦しい生活をしていました。(図-4)

一六五一年には一三五〇枚も集められたテンの毛皮も一六九七年には三〇〇枚に急減し、キツネの毛皮でも良いということになり、やがては金で納税するようになってきます。

こうした生活の中で、先住民達は一層北へ足を伸ばし、タイミル半島の北に散らばる新シベリア群島に達して、いくつかの島々を氷海の中でみつけました。この頃冤罪でシベリアへ流刑されたゲデンシウトロームは、一八〇〇年代初めに猟師等と共にこれらの島々を測量を命じられ、地下資源、動植物、民族学の調査をして、シベリア科学研究の端緒を開きました。彼はマンモスはノアの洪水で流れてきた南の象ではなく、毛の生えた北国の象であること、その頃この氷の国に木が生えていたことなども化石から確めています。

一八九〇年代には生涯を極地研究に捧げたフオン・トルが永久凍土の研究をし、その論文は今でも研究者達の古典になっています。一八〇〇年代後半は北極探検の英雄時代でも広がり、ロシアに征服されたフィンランドに生まれ反露運動のためスウェーデンに移住したノルデンショルドは、何度かの北極探検

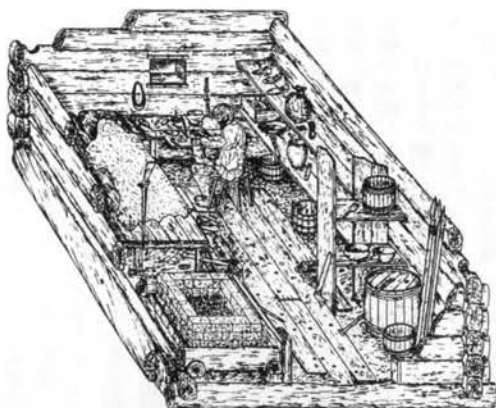


図-4 北極圏毛皮獵師の越冬丸太小舎

の後、一八七八〜九年に二本マストの帆船ヴェガ号でシベリアの北を廻り、一冬越冬した後大西洋から太平洋に出る北東航路をはじめて完通しました。そして一八七九年九月に横浜に入港し、世界へ向って探検航海の成功を打電したのです。その年（明治十二年）できただばかりの東京地方協会は、彼を名誉会員にし、記念メダルを贈って壮筆をたたえましたが、彼の本にはシベリアの先住民を観察したのと同じ目で見えた当時の日本の風俗が冷やかに描かれています。

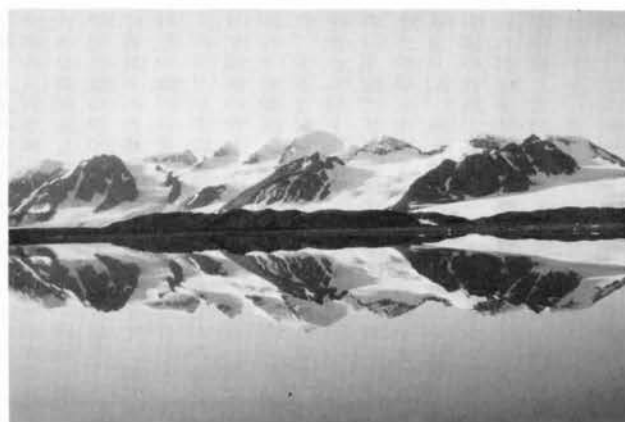
ヴェガ号がベーリング海峡を南下して日本へ向っている頃、アメリカのジャネット号がこの海峡を北上し、その秋、ウランゲル島沖で氷につかまりました。この船は二年後に氷に破壊され、その破片が更に三年後にグリーンランド南端近くの流氷の上で発見されたのです。このニュースを聞いてノルウエーのナシセンは氷と共に漂流しながら北極海を横断する探検を計画しました。そして今からおよ

うど百年前の一八九三年に新シベリア群島の北で氷に突込み、三年間の漂流の間に北緯八六度まで達し、スピッツベルゲン諸島北で氷から解放されました。この画期的な探検によって、北極海中央部には陸地はなく、単一の海盆であることが判り、近代的な海洋学研究が始まったのです。

一方北アメリカ大陸の北は、一五〇〇年代から主にイギリスによって挑戦され、約二百年間の捕鯨活動などによって南部は良く知られていました。一八四五年イギリスのフランクリン探検隊は一三〇名もの大部隊で再びこのルートに挑戦しましたが、全員行方不明になったので、捜索のため四〇隻以上の船が出かけ、この北の島々の様子がとても良く判ってきました。しかし太平洋までの完通は一九〇三〜六年のヨア号によるアムンセンの探検まで成功しませんでした。

この間、一九〇九年にはペアリーが北極点に到達し、新しい探検方法として空からの探検が試みられました。一八九七年のアンドレイ・イリヤ探検は失敗しましたが、一九二六年アムンセン等は飛行船によって北極海を横断し、航空時代の幕を開きました。

こうしている間にロシアは日露戦争に敗れて共産主義革命が起り、西欧は第一次大戦を経験します。日露戦、旅順港で東郷艦隊と渡り合って戦死したアカロフ提督は、ロシア初の砕氷船イルマック号を設計しました。一九三三年にはじめて北東航路を一夏で通過することができ、これに刺激されて北洋航路総局が設置され、バレンツ海からベーリング海峡までの船舶・航空・通信・気象調査などが総括されるようになりました。この北方重点政策で、一九三四年には八五隻、一九三六年に



スピッツベルゲン



スピッツベルゲン

は一六〇隻の船がシベリア北岸沿いに活躍しました。一九三六年は氷況が悪く、七隻の砕氷船を含む二六隻の船が氷に閉じこめられ、そのうちの一隻セドフ号は二年間氷と共に漂流し、後にグリーンランド沖で救出されています。ナンセンのフラム号やこの船の漂流の経験は、後年、氷上漂流基地の計画に生かされることになりました。

この頃のシベリアの主産物は木材でした。数軒の漁師村が五年間で二万人の町になったりして、開発が急速に進み始めます。第一次大戦後は、フィンランドから賠償として六隻の砕氷船を取り上げ、日本の「宗谷」が南極で助けられたオビ級、一、三万トンの大砕氷船もこの頃から造られ始めます。やがて世の中が第二次大戦に入ると、大量のアメリカ軍

需物資が北まわりでシベリアへ送り込まれ、工業化の資材になりました。航海の便を図るための気象観測所は一九一七年、六ヶ所しかなかったのが、一九五五年には百ヶ所を超え、かなり信頼できる気象予報を出せるようになりました。

つづく

（ノルウエー国立極地研究所教授
ノルウエー在住）

山と博物館第38巻第5号
発行所 一九九三年五月二十五日発行
〒長野県大町市 TEL 0262-2211
大町 山岳博物館
印刷所 長野県大町市後町 大糸タイムス印刷部
定価 年額 一、二三〇円（送料共）切手不可
郵便振替口座番号 長野四一三三九三三